

# 三面等価の原則

常務執行役員  
岡野 進

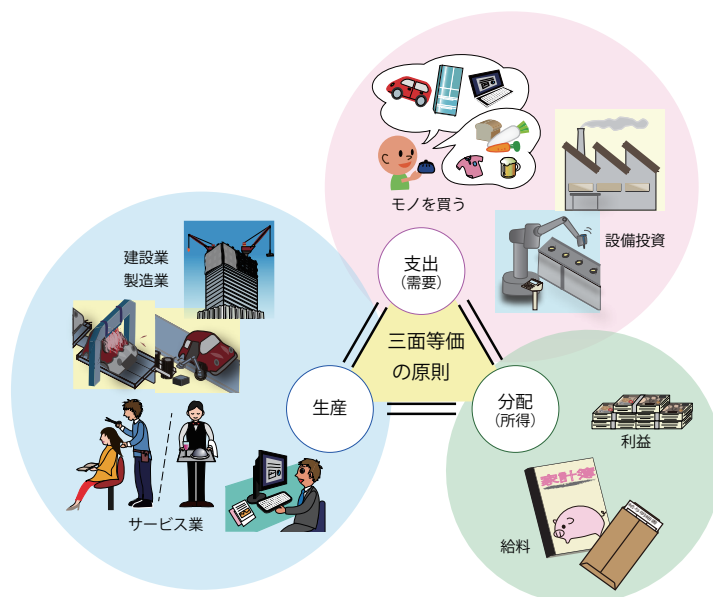


経済全体をマクロ的に見ていく視点として重要なのが「三面等価」です。生産、分配、支出の 3 つの側面が金額で見ると等しくなることを指します。これは、いわば決め事に近いわけですが、このことから経済を全体として見る観点を深めることができると思います。

経済は生き物です。多くの事象がお互いに関係しあっています。経済における量や価格の間の関係は複雑で、時系列データから統計的な方法で推計された数式で示される関数関係がいつも正しいとはいえないのです。だからといって、マクロ経済モデルが有用であることを否定するわけではありません。多くの場合には、そうしたモデルは近似的に経済の動きをうまく表現できますし、どのようなロジックで動くのかという説明力があります。

また、推計された関係ではなく、はじめから「正しい」、つまり決め事となっている数式もいくつかあります。その中でも、最も基本的なものが「三面等価」というわけです。

経済全体を立体的に捉えていこうとすると、生産、分配（所得）、支出（需要）という 3 つの軸を考えることができます。その 3 者が同額であるということは、定義的なことですが、これを踏まえて経済を見ると、経済の構造が見えやすくなってくると思います。まず、「三面等価」は生産＝分配、分配（所得）＝支出（需要）、支出＝生産という 3 つの関係に分解できます。それぞれ見ていきましょう。



---

まず、生産と分配が同額になるということですが、どういうことを指しているのでしょうか。生産を主に担っている企業活動から考えてみましょう。企業の生産活動があると、その分に応じて賃金などの人件費＝雇用者所得が発生し、企業には利益が生まれます。他の企業等からの調達も、調達先企業で生産されたモノですから重複するので、これを除外して、生産を「付加価値の生産」として見れば、大きく雇用者所得、営業余剰、固定資本減耗（減価償却費）に分解できます。固定資本減耗は過去の他部門から購入した固定資産を期間費用として考えるものですが、実際には企業がキャッシュフローとして得たものの一部分です。所得という考えでは控除すべきものですから、それぞれ固定資本減耗を除いた純付加価値生産と所得が等しい関係になっているといってもよいかもしれません。雇用者所得からは税や社会保険料など政府部門への支払いがあり、企業の営業余剰からは、税、利子・配当や賃貸料などの支払いがあります。このようにして、生産活動から発生した所得は再分配されてゆきますが、合計額は同額です。1国の国民経済の場合で考える場合には、輸入が生じることを考慮しておくべきでしょう。輸入は海外部門の所得になると考えればよいのです。ただし、既存資産の値上がりや値下がりによる利益や損失は、ここでは分配（所得）としてはカウントしません。実際には各経済主体は、既存資産の値上がりや値下がりによって経済行動を変えますが、生産に基づく所得ではないので、国民経済計算の考え方ではこれを所得には数えないのです。

さて、こうして得られた所得により各経済主体による支出が行われます。個人の場合は、個人消費、企業の場合は設備投資、政府の場合は公共投資と政府消費（[「第20回 公共投資—公共的インフラの整備」](#)、[「第21回 政府消費—公的な『消費』の中身」](#)参照）があります。また海外部門の支出というのは日本からの輸出と考えられます。それぞれの主体について、可処分所得と支出額が一致するわけではありません。しかし、全体として所得以上に支出することはできませんし、支出以上に所得も発生しません。そこで、分配（所得）＝支出の関係になります。国内の個人も企業も政府も可処分所得未満の支出しかしないのであれば、その分は海外部門が所得以上に支出していなければいけません。すなわち、それだけ輸出が輸入を上回っている＝貿易黒字ということになります。

次に支出と生産の関係です。海外部門も含めて支出と生産の関係をみると生産以上に支出することはできませんし、支出以上に生産されることもありません。もちろん、通常感覚で見ると企業が生産しても売り上げられず余ってしまうということもあります。しかし、この場合には余った生産物は在庫投資とカウントされ、在庫投資も企業の支出ですから、生産と支出の額は一致することになります。逆説的ですが、在庫投資の増減は、前向きな場合もあれば、後ろ向きの売れ残りの増減という場合もあるということがわかります。

三面等価の他にも、金融取引や金融資産負債の総額は、海外部門も含めれば必ず差引ゼロになるという関係など、はじめから決め事になっていることがあり、これらを認識しておくことは経済を考える上での大切な基本といえるでしょう。

（以上）